修猷館ラグビーOBクラブ

会報　平成24年3月号

修猷館ラグビー部　公式ホームページ
URL http://rugby-shuyukan.com/

今こそ、できること

研修旅行で宮城県名取市閖上地区を訪れた修猷生＝修猷館高ホームページより

ー東日本大震災から1年ー

東日本大震災から1年が過ぎた。死者・行方不明者1万９千人超。未曽有の災害と我々はどう向き合えばいいのか。遠い地の出来事ではない。釜石が全国的にラグビーの街として知られるようになる礎を築いた名誉会長と、実際に被災地を訪れた現役の声に耳を傾け、今、そして、これからできることの参考にしたい。

釜石を思い、後輩を思う

柴田忠敏 名誉会長（73）

1年前、テレビの向こうには、信じられない光景が広がっていた。「三陸のリアス式海岸は、田老のほうから宮古、山田、大槌、釜石、そして大船渡のほうまで、ずっと歩いている。映像や写真をみたら、『あそこだな』とすぐわかる。行ったところばかり。地震の後、仲間から『行こう』と声をかけてもらったが、断った。嫌な思いは、この歳では耐えられん」。ラグビーと同じくらい魚釣りを愛する柴田には、何度も訪れたところばかり。やり切れなさが増幅していった。「ラグビーの連中はもとより、会社の同僚、部下、その方々が大丈夫だったとしても、奥さん、親族はどうだったのか？根掘り葉掘りは聞けないし・・・」。被災地の方々と長年やりとりが続いていた年賀状。「実は父がこのたびの震災で・・・」年明け、こんなはがきが数通戻ってきた。九州で直接その痛みを理解するのは難しいが、柴田にとって「３・１１」は決して他人事ではない。

１９８５年、新日鉄釜石は前人未到の7年連続日本一を達成した。日本のラグビー史に名を残したその時から２０年前、初めて「日本一」になり、黄金時代へのきっかけになったことはあまり知られていない。主将でチームを引っ張ったのが柴田だった。

基礎からコツコツ

釜石時代

１９５９年、ほとんどが素人の約２０人で発足した同好会チームは、翌年、専門部に昇格、当時、日本ラグビーを牽引していた八幡製鉄を見据え、「東の釜石、西の八幡」をスローガンに「強化五カ年計画」が練られた。計画にのっとり、６１年、大卒第1号選手として入部したのが柴田だった。

柴田は立教大に進んでいたが、明治大の北島忠治監督に入社を勧められ、釜石行きを即決した。大学時代、九州代表に選ばれたＳＨ。学生のころから、八幡製鉄などの厳しい練習を知っており、卒業後はラグビー一途という感じではなかった。歴史が浅いチームだけに、引退後、いつまでたっても大ＯＢでいられるかな。そんな冗談めいた思いもあった。

「縁もゆかりもない、陸の孤島みたいなところ。釜石線を汽車ポッポに乗って、顔が真っ黒けになって山を越えた。うなぎの寝床のように開けたなと思ったら、そこに製鉄所があった。仕事は一人前にしてからラグビーをやろうと。人並みのことした後でやるんだから、かえって励みになった」。

釜石はこのシーズン初めて全国社会人大会に出場するなど着実に力をつけていった。６５年の夏、主将に指名され、10月の岐阜国体準決勝で目標にしてきた八幡製鉄と初めて対戦する機会がやってきた。３年連続日本一を誇っていた八幡が圧倒的に有利とみられたが、若手を使う思い切った選手起用も当たり、３２－０で快勝。勢いに乗って決勝でも三菱自工京都を破り、創部7年目で初優勝を飾った。全国社会人大会では準々決勝で京都市役所と引き分け、抽選で準決勝へは進めなかったが、このシーズンは２１勝２分けの無敗。７連覇の期間中でも、シーズンを無敗で乗り切ったのは1回しかなかった。歴史を確かに刻んだ。

1962年、日本代表に選ばれフランス学生選抜と対戦した

現役引退後も２度、釜石に赴任し、新日鉄関連のスーパーの社長などを務めた。引き継がれて営業していたスーパーの中には、昨年の津波で被害を受けた建物もあった。

「一般的に東北の人は我慢強い、粘り強い、と言われるけれど、選手を鍛えてみて、誰が辛抱できるかといったら、漁師の子だった。小さい頃からたたき上げられていたから。一度、方向付けをすると、しがみついてきた。当時は他に何もなかったし、やったらやっただけ、実りがみえた。そういう意味では常勝になってからの方が大変だったと思う」

新日鉄釜石を引き継いだシーウェイブスにも、また、あの時のような力強さを取り戻してほしい、と願う。

「冬になれば、グラウンドは凍ってカタン、カタン。スパイクの歯が刺さらない。手袋にトレパン、目だけ出しているような形で走る。ラグビーにはならなかった。それでやったのが体力作り。ずーと走ってたよ。ボールは持たない。それで基礎体力がついた。相手もおらんし。どことやっても、格闘技の延長線上、体力さえつけとけば、なんかなる。技術とかなんとかは、２か月もあればできる。最終的には、どこにも負けない体力ができた」

ラグビーは急速に進化を続け、毎年のようにルールも変わる。それでも、すべての基本が体力にある、と柴田は指摘する。あと少し一歩前に出られる脚力があれば、ノックオンはかなり防げるかもしれない。あと少し首の力が強ければ、スクラムで反則はとられないかもしれない。多くのミスがちょっとした体力不足と無関係ではない。今の修猷の現役選手を見ていて、歯がゆい部分であり、コツコツと着実に歩むことは復興へのヒントでもある。

バスケットボールを楽しんだ城西中から修猷へ入った。自動車研究部でスクーターを分解していたあの夏。暑くて上半身裸で作業していると、「お前、いい体しとうねー」と声をかけられた。隣の部室がラグビー部だった。軽い気持ちで練習に参加してみると、もう逃げられなかった。その冬、先輩たちに全国大会へ連れて行ってもらった。あれから６０年近く、楕円球への思いは尽きない。その1ページを彩る釜石への思いも、また、勝るとも劣らない。

（敬称略）

五感で触れた被災地

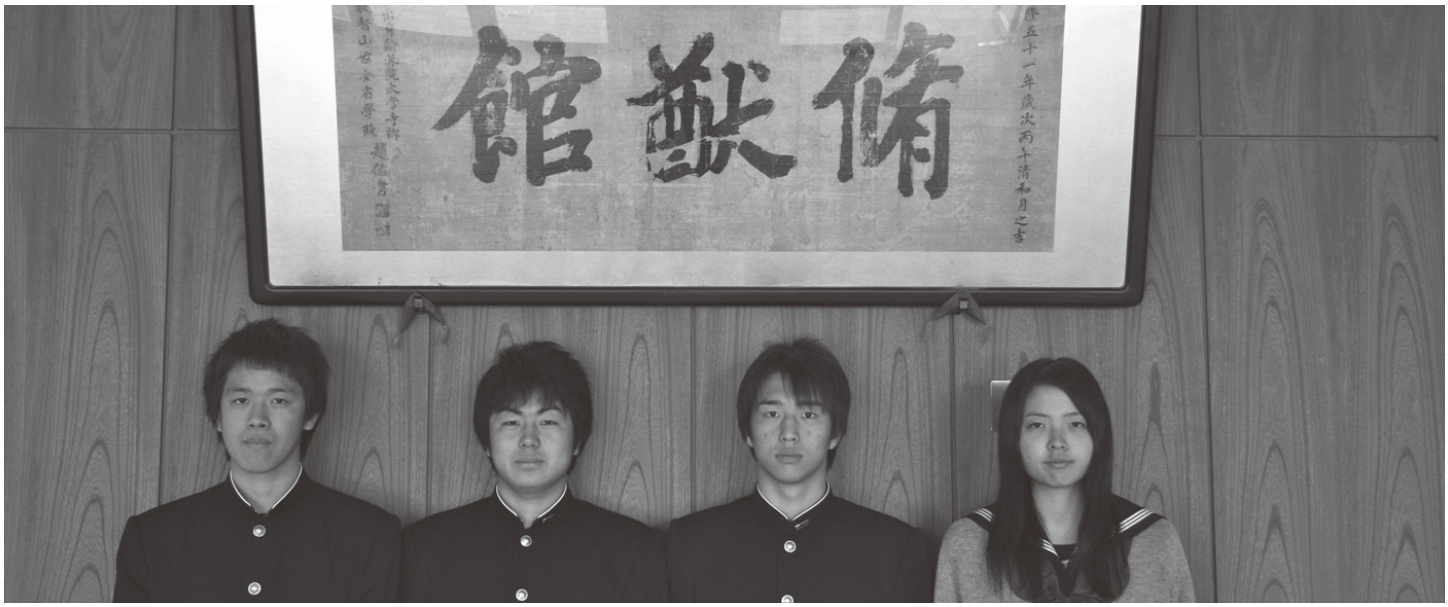
現役の２年生部員２０人は、同級生とともにこの1月、研修旅行で宮城県名取市など被災地を訪れた。昨年の計画段階から行くこと自体の是非など様々な意見もあったが、学生たちはもちろん、中嶋利昭館長やラグビー部監督で２年の学年主任の渡邊康宏先生らが検討を重ね実現にこぎつけた。

大長　優（FW）「実際に行ったら、目で見るだけではなく、例えば石巻では海岸沿いだったので魚の腐敗した臭いなどを感じた。体全体でいろんなことを感じ、被害の程度の大きさがわかった」

野中　拓（ＦＷ）「テレビの映像では目と耳だけだが、現地に行くと、五感を通してわかる。人の気持ちは現地に行って話を聞かなければわからなかった。震災で暗くなっている、というイメージがあったけれど、本当に前向きに生きておられた」

湯川　泰雅（バックス）「名取市閖上（ゆりあげ）地区は、元々、更地だったのではないか、と思えるほど何もなくなっていた。現場に立ち、より主観を交えて考えてみるとこの震災の凄さがわかった。仙台での交流会で、同じ高校生の話を聞き、より身近に感じて怖くなった」

霜田　桃子（マネジャー）「想像していた以上に現地は違っていた。地元の方の話を聞き、私たちがショックを受けているのに、淡々と話される姿が印象的で、人の強さというものを感じた。交流会で、現地の高校生が『自分たちを被災者として扱ってほしくない』と発言するなど、私たちより自分たちの考え方をしっかり持っていると思った」



ラグビー力で復興を

scrum kamaishi kickoff!
スクラム釜石

東北復興はラグビーと共にあり！！

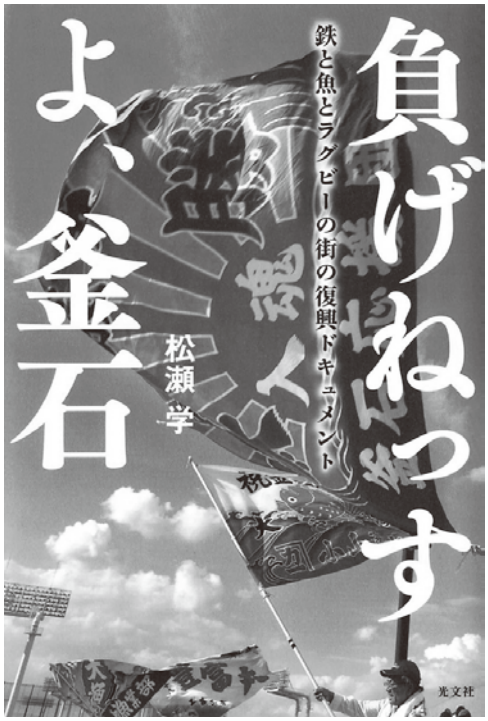
釜石市を本拠とするクラブチーム「釜石シーウェイブス」を支えるために、チームの前身で日本選手権７連覇を果たした新日鉄釜石のＯＢらが立ち上げた支援組織が「スクラム釜石」だ。　２００１年に誕生したシーウェイブスは地元企業などのスポンサーに支えられ年間６千万～７千万円の運営費でトップリーグ昇格を目指してきた。しかし、サポーターの多くも被災したため、サポーターの会員数拡大による運営費の支援を活動の柱の一つとしている。昨年５月の設立後、全国各地の復興支援イベントやラグビー大会に出かけ、シーウェイブスのサポーター申し込みや寄付金を受け付けてきた。　そして、もうひとつの大きな柱が、２０１９年ワールドカップ日本大会を釜石に誘致するプランの支援だ。街の復興に加え、地元の盛り上がりや、国際大会に見合う競技場の建設など乗り越えなければならない課題は多い。それでも単なる夢に終わらせないことが、東北の復興に必ずつながることになると活動を続けている。今冬に大阪・花園ラグビー場で開かれた第９１回全国高校大会にもシーウェイブスのマスコットキャラクター「なかぴー」がかけつけＰＲした。

修猷ＲＯＢクラブからも既に義援金は送られたが、趣旨に賛同される方は引き続きご支援をよろしくお願いします。

シーウェイブスのサポーター申し込みは、
ホームページをご覧ください。
http://www.kamaishi-seawaves.com/supporter/fanclub.html

もっと知りたい人は

松瀬学さん（Ｓ５４年卒）が「負げねっすよ、釜石　鉄と魚とラグビーの街の復興ドキュメント」（光文社）を昨秋、書き下ろした。大震災から１０日後には自ら釜石に入るなど、何度も現地に通い、３・１１から立ち直ろうとする釜石の姿をシーウェイブス関係者や漁師の方を通じて描いている。



トップの力わかった

１月から２月にかけて行われた新チーム最初の公式戦、第３４回全九州高校新人大会福岡県予選は波乱の大会となった。高校ラグビーで３年以上負けていなかった東福岡が決勝で筑紫に２０－２５で敗れ、公式戦の無敗記録が「８３」で止まった。

修猷館は４回戦から登場し柏陵を６４－７で下した後、準々決勝で筑紫と対戦した。３－５５とトライを奪えず力負けしたが、前半は３－１９。特に序盤は互角以上にわたりあい、体力や集中力を持続できれば、十分戦える可能性を感じさせた。ベスト４に残った福岡、小倉も地力があり、今季の福岡県のレベルは相変わらず高いが、あと半年余りあればチーム力は驚くほど向上する。４月に新人を迎えた後、永富主将を中心に、大きく変身する姿に期待したい。

時折、激しいタックルで筑紫を苦しめた

教育の成果とは

中嶋利昭　館 長

「ノーサイドの笛がグラウンドに響き渡り、我が修猷の戦士たちは跪（ひざまず）き、芝を握りしめた。」（修猷館ラグビー七十周年史より）

今年の正月も、東福岡高校が圧倒的な力で全国大会三連覇を成し遂げて終わった。

ここ数年、六十名近い部員数を抱える修猷館高校ラグビー部も、東福岡、筑紫という高校ラグビー界を代表するチームの厚い壁に跳ね返され、幾度となく「輿望は重し」を歌い、ベンチ内でOB、保護者の悲嘆の溜め息が寄せては返す玄界灘の波のように尽きない日々となっている。

私が平成六年四月に数学教師として修猷館に着任以来18年経とうとしている。平成十年に教頭、平成十八年には館長として奉職させていただき、その間、多くの生徒、保護者、卒業生との出会いをいただいた。

こういう中にあって、ラグビー関係でいえば、今でも鮮明に残っているシーンがある。阪神淡路大震災(H7.1.17.)が起きて間がない頃、福岡県高校ラグビー界にも、それに匹敵する衝撃が走った。

【平成七年一月二十二日新人戦県大会一回戦　修猷17ー7東福岡】

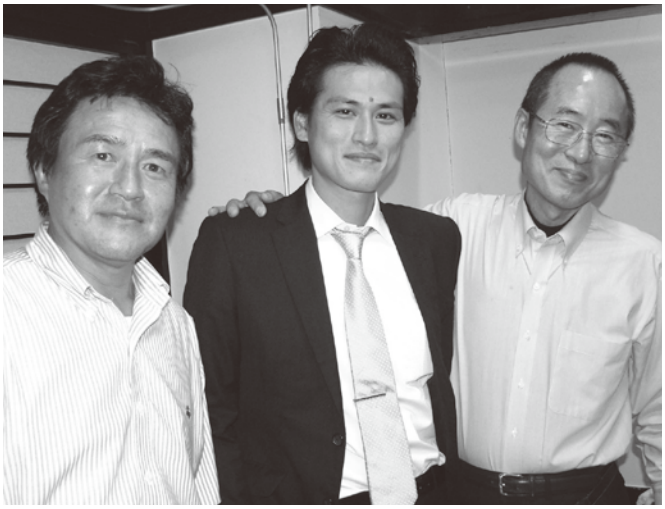
翌日の西日本新聞には「不覚！東福岡」の見出しで記事が大きく載った。

「強豪東福岡が、一回戦で修猷館に敗れる大波乱があった。県内で東福岡が負けたのは四年ぶり。『相手のディフェンスにまとまりがあり、こちらには心の油断があった』と谷崎監督。前半7ー10で折り返した東福岡は後半、猛然と責め立てた、だが、焦りがあったのか、再三ゴール前で反則を取られ、リズムを失った。反対に耐える修猷館にトライを奪われ、突き放された。」

このチームは、新人戦で県大会優勝、九州大会準優勝を成し遂げたのである。負けた東福岡の選手たちは、部室の扉にこの記事を張り付け、雪辱を誓ったという。

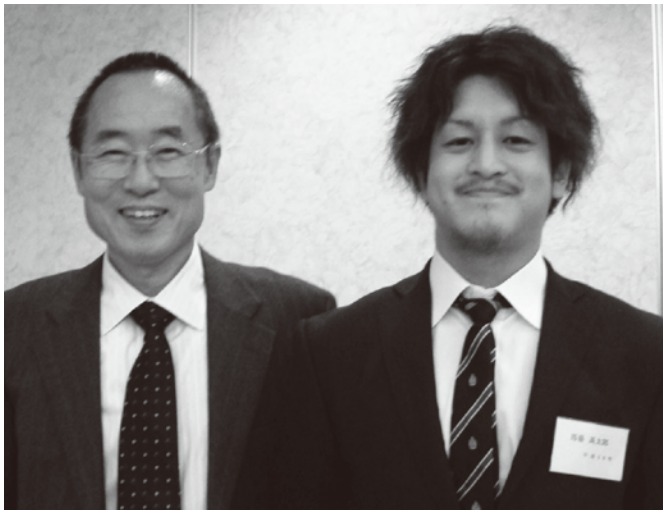
昨春、残り一年にして再び修猷に復帰して以来、自らの使命を問い続けてきた。

秋、第二十回熊本修猷会(11/26)に、私が二年、三年と担任した中曽根豊君（H8年卒）が駆けつけてくれた。彼は、ラグビー部でFWとして上記チームで活躍後、熊本大学医学部に進学、現在大学医局の放射線医師として活躍中である。愛称「くまモン」大きな体と、顔一杯の髭面がまさにそのままだった。横はマネージャーの秋永さん（↑）



12/3東北修猷会設立総会では、橋本隼人君(H13年卒)ーラグビー部の「やんちゃ」ということで強く印象に残っている生徒だったが、名刺を見ると某大手保険会社の営業課長、惚れ惚れする男になりました　(←)

12/10長崎修猷会総会では、馬場高太郎君（H20年卒）ー彼もラグビー部の「やんちゃ者」だった。現在、長崎大学歯学部に在学中。（→）



修猷の生徒を見るときは、目先ではなく遠目でみてやることが必要だと思うと同時に、修猷生が高校三年間で得るものとは何なのか改めて問う機会ともなった。

5年前、本校３年生も参加した全国の国公立・私立の進学校生徒4000人を対象とした意識調査が行われた。その報告書「地方公立進学校におけるエリート再生の研究」（東京大学大学院教育研究科紀要第４７号(H20年3月)）、さらには高校卒業後の調査を継続した報告書「格差社会における大学進学者の能力と意識」（東京大学大学院教育研究科紀要第４８号(H21年3月)）において「そもそも教育の成果とは、単に受験競争に勝ち残った人間を何人養成したか、難関大学に何人送り出したかによって測られるものではない。生徒たちがどのような『人財』として社会に貢献しようとしているのか、世のため、人のために尽くそうという志向を持った人をどれだけ輩出したかによって、教育の成果は測られるべきであろう。」との提言がなされていた。

ラグビーを通じ、体のぶつかり合いの中から他人の「痛み」を理解し、攻撃、防禦を一瞬で判断できる「未来予測能力」と「判断力」、集団の中での「リーダーシップ」と「フォロワーシップ」等、人間として生きる力の根源を鍛え、身体に染み込ませた者こそ、この混沌とした社会の救済者として存在しうることであろう。苦しみ、悲しみ、痛みを知った人間は、人としての厚み、深み、そして広がりを持っている。たとえ試合で負けたとしても、人生の勝者としての階段を'践み修めている'ことを確信している。

最後になりますが、安部会長を始め修猷館高校ラグビー関係者から長年にわたりご厚情をいただいたことに対しまして深く感謝を申し上げます。また、一方で、長年の懸案である「運動場の人工芝」化に対しては力及ばず未だに実現できていないことを心からお詫びし、少し早くもありますが、退任の挨拶とさせていただきます。

中嶋館長　ありがとうございました

新OB歓迎会のご案内

３月１７日に恒例の新OB歓迎会を実施します。ふるってご参加ください 。

16時20分より　OB戦（修猷館グラウンド）
18時30分より　新OB歓迎会 (ピエトロ)
場所：ピエトロ　セントラーレ（本店）
福岡市中央区天神３-４-５　ピエトロビル１Ｆ　電話092-715-8281
会費：５，０００円

● 発行 / 修猷館ラグビー部OBクラブ
ＴＥＬ　０９２-５４１-５５０３